

加古川市協働のまちづくり推進事業

西条古墳群

兵庫県加古川市神野町



2021 年 8 月

東播磨地域史懇話会

当町内には古くから人々の生活した足跡が残されております。なかでも弥生時代終わりころから古墳時代後期にかけて多くの古墳が丘陵上につくられました。しかし、今から約 60 年前に神野団地造成に伴い行者塚、尼塚、人塚を除き 40 基以上の古墳が消滅しました。当町の「西条会館」には、その時の発掘調査で出土した須恵器^{すえき}や土師器^{はじき}、埴輪^{はにわ}、鉄器などの遺物を保管していますが、これら遺物は、発掘調査終了後も歴史的な位置づけのないまま今日に至っていました。私が小学 5 年生の時、ミイラが発掘されたと聞き、急いで現場に駆け付けました。20 歳前後の女性であるとのことでしたが今でもその姿を鮮明に記憶しています。このたび、「東播磨地域史懇話会」の方々により、平成 30 年度からこれら遺物の整理や実測作業などが始まり、歴史的な位置づけも行われ、報告書が発刊される運びとなりました。この報告書を通じて、私たちの祖先の姿がよみがえることとなります。残された古墳や廃寺などの歴史的遺産を大切にしたいと思います。今回、調査を行っていただいた「東播磨地域史懇話会」の方々に町内会を代表して敬意を表し感謝を申し上げます。

はじめに

東播磨地域史懇話会会長 上月昭信

加古川市神野町西条の「西条会館」には、今から約 60 年前、神野団地造成に伴う西条古墳群の発掘調査で出土した遺物が保管されています。これら遺物は、調査終了後も「発掘調査報告書」としてまとめられることなく今日に至っています。

そこで私たち「東播磨地域史懇話会」は、「西条町内会」様のご了解を得たうえで、当時の発掘調査に携わられた方々に手紙をお送りし、これら遺物の取り扱いについてのご意見をお聞きしました。その結果、私たちがこれら遺物を「西条古墳群出土遺物調査報告書」としてまとめることについてのご了解を頂くことができました。私たちは調査者のご意思を受け継ぎ、何とかこれらの遺物を加古川下流域の歴史の中に位置付けたいと考え、兵庫県教育委員会、兵庫県立考古博物館のご指導、ご意見を賜りながら遺物整理を行ってきました。これら作業の途中、発掘当時の遺構図面や日誌、写真を保管されていた調査者のお仲間を通じこれら資料のご提供を頂くことができました。

私どもは平成 30 年（2018）から、「西条会館」と「陵北小学校」の教室をお借りして作業を行ってきました。関係各位にはこの冊子（普及ダイジェスト版）を通じて「西条古墳群」についてのご理解を賜りますようお願い申し上げます。



加古川市内の主な遺跡

野山をかける

～旧石器時代から縄文時代～

加古川の山地と、「加古川」が造り出した平野部には、さまざまな時代の人々の営みの^{こんせき いせき}痕跡－遺跡があります。今、私達はその場所に住んでいます。

加古川の平野部が、現在のように広くなかった2万年前、人々は山地とその丘陵先端部に住んでいました。それは狩りや木の実採集を中心にした営みで、その場所では人々の使った石器が出土します。志方町西山新池遺跡、岡山遺跡や平岡町の山^{やまのうえ}之上遺跡があります。

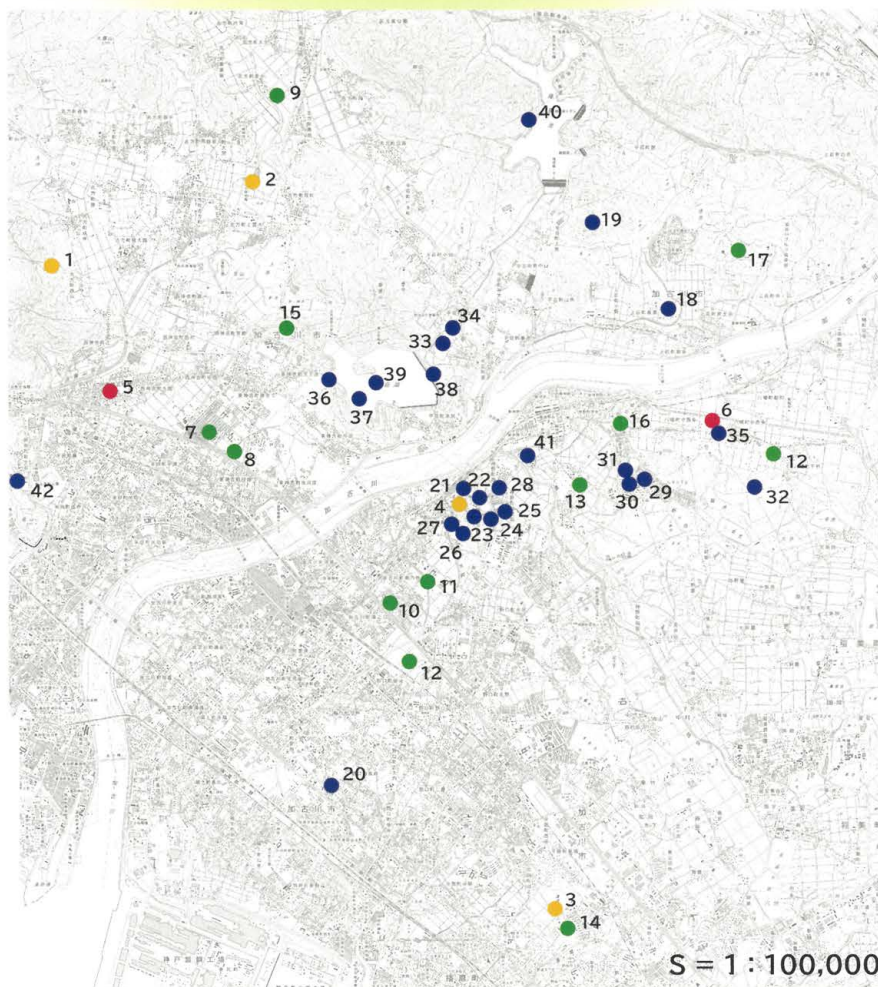
そして、彼らは一つの集団を作って台地上に定着しました。その周囲の季節の移り変わりの中で、狩りや木の実採集を定期的に繰り返し、それを食物として土器を使って料理を作り暮らしていました。この時代を縄文時代といいます。季節の中での日々の暮らしは、7000年ほど続きました。八幡町^{みやま}宮山遺跡に痕跡が残されています。

稲穂の黄色、村を取りまく

～弥生時代～

紀元前500年頃に稲作が伝わりました。時代は、弥生時代となります。人々は稲作の水田を作りやすいように、平野部に生活の場を移し、集落を営みました。いままで山に囲まれた自然環境に依存した生活から、今度は自分達が稲を栽培管理する生活が主になりました。春に種をまき、秋に刈り取りする。次の年もこのサイクルが繰り返されます。季節感がより身近なものになりました。

人口も増加し、集落も大きくなりました。この時代の遺跡は、加古川右岸に東神吉町^{いさべ}砂部遺跡、志方町^{ひがしなか}東中遺跡、加古川左岸では加古川町^{みのり}美乃利・溝之口遺跡が代表的な集落跡です。現在の加古川は、これらの集落が基礎となって発展してきました。



●旧石器時代

1. 西山新池遺跡
2. 岡山遺跡
3. 山之上遺跡
4. 日岡山遺跡

●縄文時代

5. 岸遺跡
6. 宮山遺跡

●弥生時代

7. 東神吉遺跡
8. 砂部遺跡
9. 東中遺跡
10. 溝之口遺跡
11. 美乃利遺跡
12. 坂元遺跡
13. 手末遺跡
14. 大中遺跡
15. 神吉山5号墓
16. 西条52号墓
17. ハツ塚3号墓

●古墳時代

18. 長慶寺山1号墳
19. 天坊山古墳
20. 聖陵山古墳
21. 日岡陵古墳
22. 西大塚
23. 南大塚
24. 西車塚
25. 東車塚
26. 狐塚
27. 勅使塚
28. 北大塚
29. 行者塚
30. 尼塚
31. 人塚
32. 東沢1号墳
33. 西山大塚
34. 里古墳
35. 宮山大塚
36. 升田山15号墳
37. カンス塚古墳
38. 池尻2号墳
39. 池尻16号墳
40. 中山1号墳
41. 二塚古墳
42. 石の宝殿

S = 1 : 100,000

王者の墓

～弥生時代から古墳時代～

弥生時代も終わりに近づくと、集落では、稲の作付や水路の管理の指示、他の集落との関係の調停を行う代表者が選ばれました。彼は、集落の暮らしを順調に管理するために選ばれた人です。彼が亡くなると、その人の墓が集落から離れた、日岡山や西条の丘陵上に作られました。その代表的なものが西条古墳群の 52 号墓です。墓は円形に盛り土をし、墳丘墓と呼ばれています。上荘町見土呂のハツ塚古墳群の 3 号墓も墳丘墓です。そして、集落の人々は、自分達の代表への最後の奉仕として、さらに大きな墓－前方後円墳を造り葬りました。古墳時代の始まりです。

加古川市内の古墳群

加古川左岸側では、西条古墳群の南西方向に日岡山古墳群があります。5基の前方後円墳と4基以上の円墳からなる古墳群です。日岡山の最高所に『播磨国風土記』の「ひれ墓」伝承をもつ日岡陵古墳があり、その周辺部に^{ちやくし}勅使塚、西大塚、南大塚をはじめとする古墳が築かれています。この古墳群の特色として「大和政権」との結びつきを示す^{さんかくぶちしんじゅうきょう}三角縁神獣鏡や^{かつせきせいしきしつ}滑石製石釧などが出土しています。いずれも 4 世紀代に築かれた^{しゅちやうぼ}首長墓と考えられており、この古墳群では5世紀代に入って北大塚を最後に築かれなくなります。そしてその後、首長墓は西条の台地上に移り、行者塚、尼塚、人塚が築かれていきます。

加古川右岸側での古墳の動向をみると、弥生時代終末期の時期には、^{かんきやま}神吉山5号墓やハツ塚3号墓など^{ふんきゅうぼ}墳丘墓の存在が知られています。4世紀代になると小型の前方後円墳をもつ^{ちやうけいじやま}長慶寺山古墳群や^{てんぼうざん}天坊山古墳が築かれ、いずれも鏡と鉄製農工具や武器類が出土しています。

同じく加古川右岸側の平荘湖古墳群に目を転じると、5世紀後半の古墳として^{いけじり}カンス塚や池尻2号墳があります。いずれも^{たてあなしきせきしつ}竪穴式石室を持ち^{す え き}須恵器や装身具や馬具類など^{とらいけい}渡来系の遺物が多く出土しています。6 世紀代に入ると、大陸より^{よこあなしきせきしつ}横穴式石室が導入され、加古川下流域においても横穴式石室をもつ後期古墳が次々と造られていきます。そのなかで全長が 10m を超える石室をもつ升田山 15 号墳や池尻 16 号墳が独立して築かれ、大型墳の周辺部には、小型の横穴式石室をもった群集墳が次々と築かれています。

^{さんかくぶちしんじゅうきょう}
三角縁神獣鏡



^{みなみおづか}
南大塚出土



^{ちやくしづか}
伝勅使塚出土

^{ば ぐ} ^{ぎやうよう}
馬具 (杏葉)



^{ますたやま}
升田山 15 号墳出土

加古川市教育委員会蔵
(総合文化センター博物館展示)



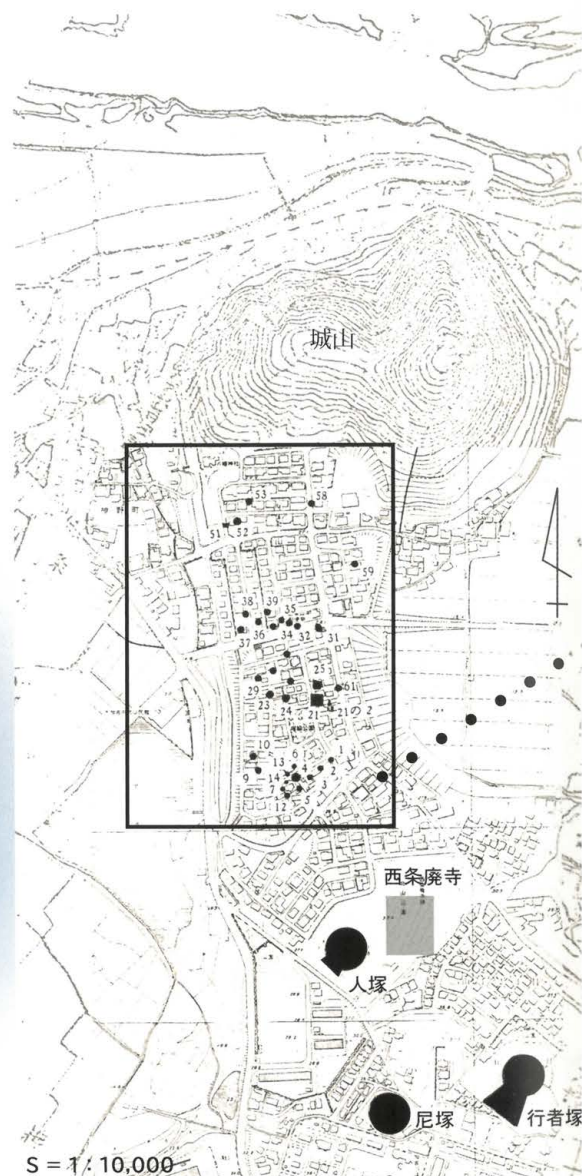
(加古川総合文化センター博物館常設展示案内別冊「行者塚古墳の時代」より転載 *註2)

西条古墳群

西条古墳群は、現在、行者塚古墳、人塚古墳、尼塚古墳が国史跡の指定を受けて保存されていますが、昭和38年頃までは神野町西条の台地上に40基以上の古墳が存在していました。それらは団地造成工事によってすべて消滅してしまいました。本来、西条古墳群とは、それらの消滅した古墳を含めた古墳群を指すものと考えています。

このような周辺部の状況をもとに西条古墳群の実態を考えると、弥生時代終末期において西条52号墓をはじめとした墳丘墓群が築かれ、その後、少し時期をおいて5世紀前半から中ごろにかけて行者塚、尼塚、人塚の首長墓が次々と築かれています。6世紀前後になると、21・25号墳などの木棺直葬墳が築かれ、その後、7世紀前後から4号墳などで横穴式石室墳の築造が続いていきます。このように西条古墳群は木棺直葬墳から横穴式石室墳への移行が確認できる古墳群といえます。

やがて、横穴式石室墳は衰退期を迎えますが、仏教の広がりとともに造墓にかけていた精力は寺の建立に向けられるようになり、人塚古墳に隣接して造られた西条廃寺は、西条古墳群の被葬者とのつながりを推定できる寺院と考えられています。



4号墳

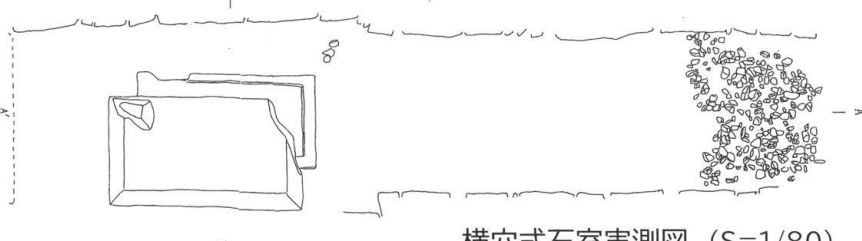
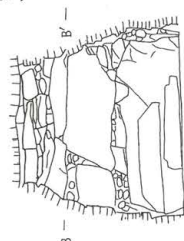
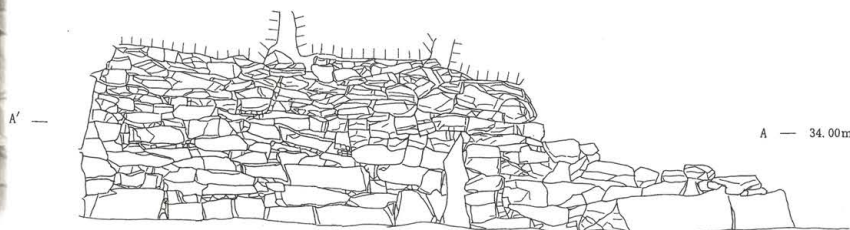
21号墳と並ぶ最大の径15mの墳丘規模を持つ。

南向きの横穴式石室（全長9m、両袖式、玄室の奥壁幅2.1m・高さ1.85m・奥行4m、側壁は小さな割石を巧みに積み、羨道幅1.78m・長さ5m）、玄室内に組合式石棺の底石（幅1m・長さ2m）と蓋石（幅1.2m・長さ2.1m）が存在する。

須恵器（坏・高坏など）・鉄器が出土した。

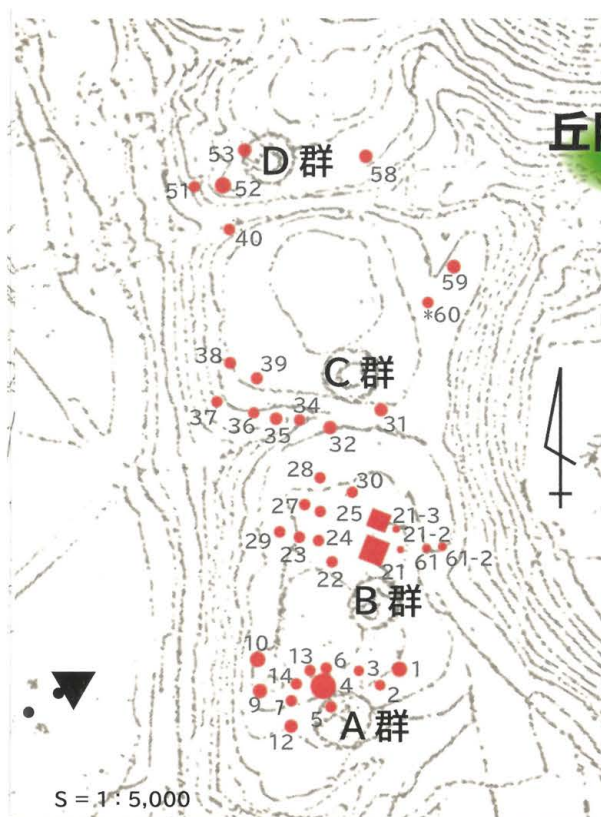


横穴式石室奥壁（*註1）



横穴式石室実測図（S=1/80）

丘陵上の古墳配置



昭和 38 年秋から 39 年 4 月に行われた調査では、調査団が急遽結成され、各地から多くの考古学研究者や学生達が駆けつけました。造成工事に追われながらの調査の中で、調査団は古墳の所在する地形から A 群、B 群、C 群、D 群の 4 群に分割して古墳の番号をつけていきました。発掘調査の結果古墳でなかったものは欠番とし、その数は 40 基以上に及びました。

A 群は、西条古墳群で最も南に位置し、行者塚や西条廃寺の北側に、小さな西向き谷を隔てて、ほぼ東西にならんで点在しています。箱式石棺を持つ 10・13 号墳、割竹形木棺を持つ 9 号墳、横穴式石室を持つ 1～7・12・14 号墳があり、須恵器・土師器・鉄器（武具・工具・農具）・金環などが出土しています。

B 群はこの台地の中央部に存する墓地の中に一群の古墳が分布しており、この中には方形のものが多く見られました。近代の墓地と重なっており、墳丘の形・主体部など不明の古墳もあります。複数の木棺直葬主体部を持つ方墳の 21・25 号墳をはじめ、小型石槨を持つ 21-2・22-3・61・61-2 号墳、ほかに詳細不明の 23・24・26～30 号墳があります。B 群からは須恵器・土師器・鉄器（武具・農具・工具）・円筒埴輪・家形埴輪などが出土しています。

C 群は B 群の北、台地に切り込んだ西向きの小さな浸蝕谷の北側に東西に点在する一群で、合わせ口土器棺（弥生後期土器）と木棺直葬主体を持つ 37・38 号墓、横穴式石室を持つ 31～36・39 号墳があります。C 群からは須恵器・土師器・鉄器・金環・陶棺などが出土しています。

D 群はこの台地の一番北にある小さな谷を利用して、上西条と中西条を結ぶ道路が開削されており、この掘割りの道路北側に存在する一群の古墳を指します。壺棺出土の 60 号墓、箱式石棺を持つ 51 号墳、竪穴式石槨（弥生時代後期）の 52 号墓、木棺直葬の 40・53・59 号墳、横穴式石室を持つ 58 号墳があります。D 群からは弥生時代後期の土器・内行花文鏡・管玉、古墳時代の須恵器・土師器が出土しています。



10号墳（墓）

墳丘の径 14 m・箱式石棺（長さ 1.6 m・幅 0.5 m）

完全な形で人骨が残っていた（被葬者は 20 才前後の女性）

副葬品は鉄器（鉄鏃・鉄刀・刀子・鉄斧）・玉（小玉）

棺内には朱が一面に付着しており、底には小石が敷き詰めてあった。

棺外には礫をならべて作った排水溝が造られていた。

（弥生時代末までさかのぼる可能性もある。）

ぎょうじゃづか 行者塚

前方後円墳

全長：99.0 m

後円部径：68.0 m

後円部高：9.1 m

4 つの造り出し, 3 段の埴輪列

円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪

帯金具・巴形銅器・鉄刀・鉄剣・鉄

製馬具・農具・鉄鋌・土製品など



金銅製帯金具 (*註3)

ともえがたどうき
巴形銅器 (*註3)



土器・土製品 (*註3)

あまづか 尼塚

造り出し付円墳

(帆立貝式古墳)

全長：51.0 m

墳丘径：45.0 m

墳丘高：6.0 m

埴輪列 (円筒埴輪)

形象埴輪

ひとづか 人塚

造り出し付円墳

(帆立貝式古墳)

全長：61.5 m以上

墳丘高：10.4 m

大小二つの突出部

埴輪列

(円筒埴輪・朝顔形埴輪)

形象埴輪 (家形・盾形ほか)



墳丘斜面の葺石 (*註3)



円筒埴輪 (*註3)

葺石と円筒埴輪列
(*註3)





かっちゅう
甲冑形埴輪 (*註3)



たて
盾形埴輪 (*註3)



家形埴輪 (*註3)



円筒埴輪 (*註3)



人塚

西条廃寺跡

(*註3)

さいじょうはいじ 西条廃寺跡

市内最古の寺院跡 (7 世紀末)

三重塔・金堂・講堂

(法隆寺式伽藍配置)

瓦積み基壇

西条古墳群に副葬された須恵器

日本の古代焼物と須恵器の話

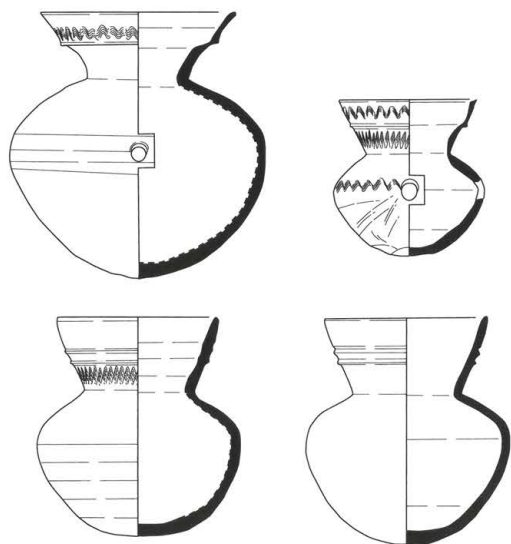
日本の焼物は縄文土器に始まり、弥生土器・古墳時代の土師器へと時代が進むに連れて名前が変わりますが、基本的にはすべて地面に穴を掘って低温度で焼いた素焼の焼物です。ところが、この日本の伝統的な素焼の焼物に対して4世紀から5世紀ころ朝鮮半島から本格的な窯（穴窯）を用いて高温焼成された硬質の焼物が伝えられました。この外来の焼物は日本では須恵器と呼ばれ、後の備前焼や丹波焼などのルーツとなりました。この須恵器という焼物は灰色をしていますので、今日、カラフルでいろいろな種類の焼物を目にする私たちにとっては少し地味に写るかもしれません。しかし、当時、須恵器はそれまでにはなかった新しい技術で作られた外来の高級品です。

須恵器の入手と技術の伝播

朝鮮半島から伝えられた須恵器の技術は、九州から瀬戸内海を経由して、最終的に大阪の泉北地方（陶邑窯 / 堺市・和泉市）に定着します。当初、須恵器は陶邑窯で独占的に生産され、全国に供給されました。このような独占的生産と一元的供給の背景には中央の大王家や豪族が関わっていたとされています。やがて5世紀後半頃になると、須恵器の需要が高まり、陶邑窯が独占していた須恵器の生産技術は各地に伝播します。各地への須恵器技術の伝播は大和政権と地方の支配者層との密接な関係が背景にあったと一般的に考えられています。

神野地域には行者塚から西条古墳群に連なる古代の大きな勢力があり、古代加古川の中心地域でありました。西条古墳群からはたくさんの須恵器が出土しています。このうち、西条古墳群の形成初期にあたる5世紀後半代の古墳出土の須恵器は陶邑産の可能性が高く、西条古墳群の被葬者と大和政権と何らかの政治的なつながりによって当地にもたらされたと考えられます。

このように大和政権とも密接なつながりのあった西条古墳群の被葬者は、いち早く泉北地方の工人を招来し、自らの勢力下の場所で窯を築かせて、加古川地域に製品を独占的に供給していきました。



出土須恵器 (S=1/4)

(右上 23 号墳、他は 25 号墳)



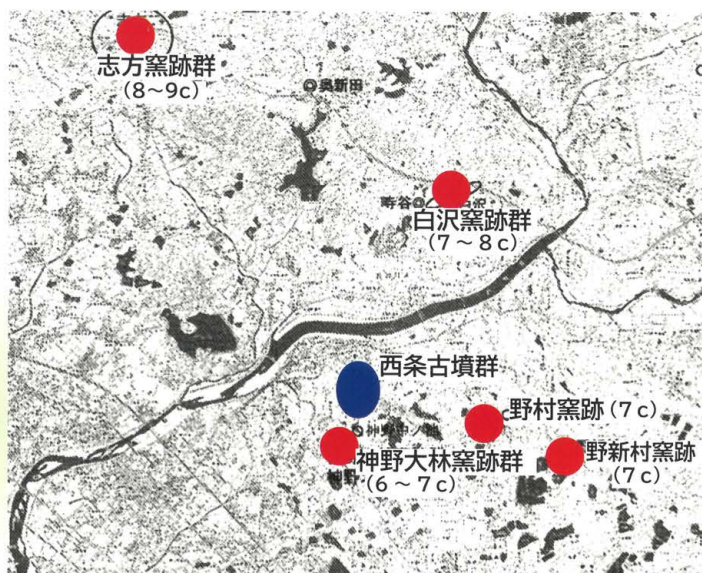
神野町神野には 6 世紀中頃から 7 世紀にかけての須恵器窯跡が発見されており、このうち、県立加古川医療センター建設に先立って、3 基の窯跡（神野大林窯跡群）の発掘調査が行われています。西条古墳群出土の 6 世紀前後の須恵器には地元産と思われるものも含まれていることから、神野地域では神野大林窯跡群よりも前から操業が始められたと推察されますが、この開始期にあたる 6 世紀前後の須恵器窯はまだ、発見されていません。

須恵器というのは、当時の工業製品であり、神野地域には当時の最先端技術をもった工場があったということになります。実際、市内の各所から、神野大林窯産の須恵器が出土しており、神野地域からはかなり広範囲に製品が供給されていることがわかります。

西条古墳群と出土須恵器

25・21・29 号墳は西条古墳群のうちで最初の頃に築かれた 5 世紀後半から 6 世紀前半の古墳です。5 世紀後半の須恵器は高い技術力で製作されたもので、おそらくは陶邑窯産のものと思われます。ところが、6 世紀前後の古墳では、陶邑産と思われる須恵器に混じって地元産と思われる須恵器が含まれています。なぜ、地元産とわかるかと言うと、本場の製品を模倣して作られていますので、本場のものよりも少し形が崩れており、また、焼きの具合が異なります。

したがって、6 世紀前半以降の古墳では、副葬された須恵器は陶邑産からすべて地元の神野大林窯産に代わります。このように、副葬された須恵器の変化を観察してみると、西条古墳群の形成とは別に、当地方での窯業技術の導入とその発展という産業的側面も見ることができます。



周辺の須恵器窯跡分布図

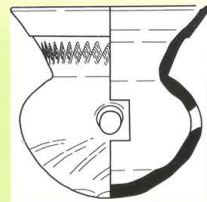
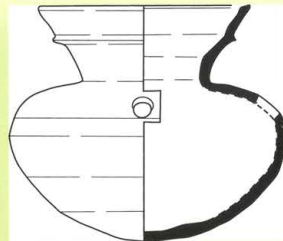


須恵器復元窯
(三木市)

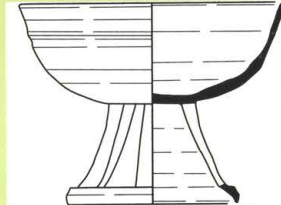
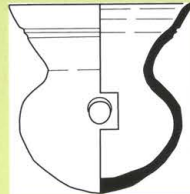
発掘調査が行われた神野大林3号窯跡
上：俯瞰 下：焚口から（*註4）

出土した須恵器

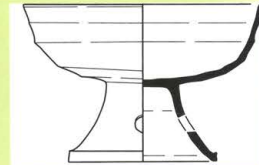
6 世紀



25 号墳



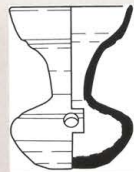
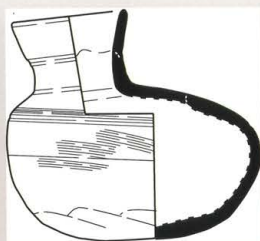
21 号墳



29 号墳



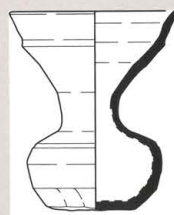
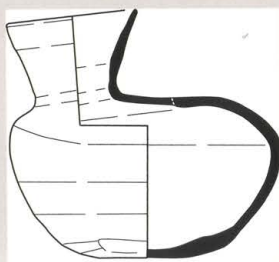
7 世紀



39 号墳



14 号墳



31 号墳

34 号墳



(S=1/4)

加古川の須恵器の技術と発展

縄文土器・弥生土器・土師器は 700 ～ 800℃ くらいの低い温度で、しかも酸素の多い状態で焼かれたので赤い色調をしています。^{さんかえんしょうせい}（酸化焰焼成）これに対して須恵器は 1000℃ 以上の高温で、焼成最終段階で酸素のない状態で焼かれたために灰色をしています^{かんげんしょうせい}（還元焰焼成）。焼物の焼成原理は陶土の中に含まれるガラス成分^{けいさん}（珪酸）が熱で融解し、珪酸のガラス成分が周囲の土粒同士を絡めることです。すなわち、珪酸を多く含む粘土の方が陶土に適していることになります。ところが、いなみ野台地は、大阪層群といって砂・れき・粘土が互層になった海や湖の堆積層^{たいせきそう}で、斜面を掘って作る穴窯^{あながま}や陶土には適した土地ではありません。にもかかわらず、神野に須恵器窯が築かれたのは、西条古墳群をはじめとする有力者層の存在が背景にあったからにほかなりません。

ただ、神野での須恵器生産は 7 世紀前後には終了し、生産地は八幡町（野村・野新村）へ、さらに 8 世紀になると、生産地は加古川市の北西部の志方町に移ります。志方町で生産が爆発的に拡大し、その数は 100 基以上に上ります。志方町の土は長石や石英などの珪酸塩鉱物^{けいさんえんこうぶつ}を含み焼物の土に適しています。このため質の高い製品が作られ、平城京においても貴族層の邸宅でも使用されていたことがわかっています。志方窯を含む播磨地方は西日本の窯業の中心地として後の丹波焼や備前焼を生み出す母体となります。神野での須恵器生産はその発展の先駆けとして注目されます。



土師器



須恵器



須恵器復元窯（三木市）

での焼成実験状況

上：焚き口

中：窯焚き内部

下：焼き上がり



西条52号墓と同時期の出土遺物

西条古墳群調査の際、北寄りで発見された52号墓は
 えんきゅう とっしゅつば ふんきゅう
 円丘と突出部からなる墳丘（盛り土）に割石で組まれた
 たてあなしせつかく
 竪穴式石槨を持っていました。古墳群ができる前、弥生時代
 後期（3世紀前半）に造られたものです。石槨の床面には
 しゅ えんれき もっかん てっけん
 朱を塗った小円礫を敷き詰め、木棺・鉄剣が置かれていた
 ようです。蓋石の上には多量の小さな川原石を積み上げた
 ふたいし
 円礫堆を持ち、鏡や弥生土器が出土しました。鏡は中国製
 えんれきたい
 の内行花文鏡で、石槨周囲からは壺と鉢が合わせ口（身と
 ないこうかもんきょう
 蓋がセット）となる土器棺が5カ所から出土しています。当
 ときかん
 時まだ類例を見なかった前方後円墳につながる時期の墓制と
 ほせい
 して調査当初から注目を集めていました。

今回調査の出土遺物の中にも、ほぼ同時期と見なされる
 土器棺が複数、身と蓋のセットで確認されています。



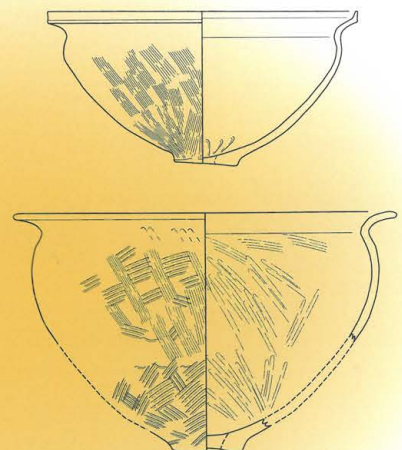
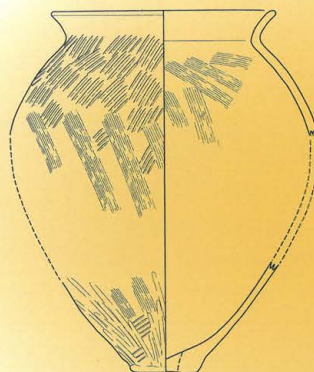
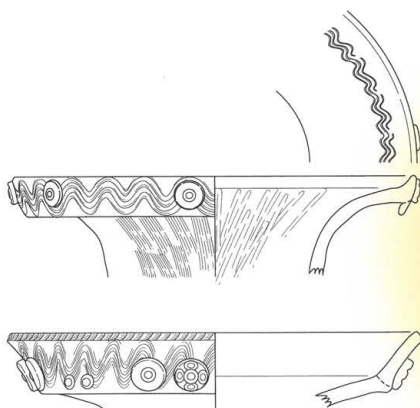
52号墓出土内行花文鏡（*註4）



52号墓竪穴式石槨（*註1）



52号墓出土弥生土器（*註4）



32号（左下）・37号（左上）・60号（中・右）墓から出土した弥生土器（S=1/6）



21号墳 二主体（4号棺）



10号墳 箱式石棺



13号墳 b主体



2号墳 横穴式石室



21号墳 家形埴輪出土状況



34号墳 横穴式石室

編集後記

本誌作成にあたっては下記の諸機関のご協力をいただきました。記して深く感謝いたします。

協力機関 西条町内会 西条古墳群発掘調査団 加古川市教育委員会文化財調査研究センター
加古川市市民協働部市民活動推進課 陵北小学校 永井信弘・岩本めぐみ（安西工業株式会社）
画像提供 西条古墳群発掘調査団（*註1） 加古川総合文化センター博物館（p4 *註2）
加古川市教育委員会文化財調査研究センター（表紙・p7・8 *註3）
兵庫県立考古博物館（p10・13 *註4）

*順不同・敬称略

編著者一同 東播磨地域史懇話会（上月昭信 岡本一士 森内秀造 山本祐作 友久伸子）



4号墳



37号墳



4号墳石室内石棺材



2号墳



重機に乗って実測作業

西条古墳群（普及ダイジェスト版）

発行日 2021年 8月 31日

企画・編集 東播磨地域史懇話会考古部会

印刷 日坂印刷所

*この調査研究は加古川市協働のまちづくり推進事業補助金を活用しての取り組みです。